

この命、義に捧ぐ

台湾を救った陸軍中将 根本博の奇跡

先日、台湾で台北松山空港を飛び立った飛行機が、高速道路をかすめて川に墜落した事故があったが、その行く先は金門島であった。……ちょうどこの文章を書いていたところだったので、そういう意味で驚いた。(台湾の高速道路は、3本あるが、一朝事あれば飛行機というより戦闘機の離発着ができるように設計されている。日本のように利権がらみで蛇行するようなバカなことは考えない。それほど世界の常識と日本の平和ボケとのズレは大きい。ドイツのアウトバーンもまっすぐ走り、ヒットラーが行った唯一のいいことと揶揄されるが、もともと戦闘機が離発着できるように作られたものである。)

興味がないというのは、ある意味単なる「無知」ではすまず、生命にかかわることもある、というのは、われわれの業界では常識になっている。ボクは、中国と台湾との国境は、台湾海峡だとばかり思っていた。ところが、大陸から2km、台湾から180kmの所にある金門島は台湾領で、この2国の国境は、アモイ(厦門)と金門島との間の海峡にある、とこの本によって教えられた。

一言で言えば、根本中将の業績は、この金門島を台湾の領土にしたものである。これに付随して澎湖、馬祖も台湾領となる。

今、ボクの中のブームはいくつかあるのだが、そのひとつが門田隆将氏の著書を読むことである。代表作は、「死の淵を見た男 吉田昌郎と福島第一原発の500日」で、朝日新聞の福島第一原発の事故のときフクシマ・フィフティと世界中から賞賛された人々の勇気を頭から否定した朝日新聞の捏造記事を最初に指摘した人物である。(このとき、朝日新聞は、「大朝日に楯突く気か。いざとなれば訴訟するぞ!」と脅迫まがいの文書を送りつけ、のちに嘘とばれた時に謝罪した。卑劣な連中や。)

門田氏の著作の特徴は、当事者にロング・インタビューをおこない、それをまとめるものであるが、主人公が物故しているときは、その遺族や縁辺の人々の話を聞いて、綿密な調査と相俟ってまとめたものである。

以前にも書いたが、この手法は、子母澤寛氏が確立したもので、たとえば幕末維新の生き残りの人々を訪ね歩き、新撰組三部作を著し、今もって新撰組に関する著作でこれを超えたものはない。……この方法の欠点は、「人みな自分を飾る」から、複数の人間の語ることの整合性を確かめる必要や、文献と合致するかどうかの判断をせまられることである。たとえば吉村昭氏は3人が語らなければ文章にしないという。

表題の根本博元陸軍中将の話は台湾では歴史としては抹殺されていて、知る人がなかった。

台湾人で、古き良き時代の日本統治時代の台湾を知る黄文雄氏でさえ知らなかった。門田氏の10数年にわたる心血を注いだ業績を絶賛している。

実は、この本を読んでいる時、さながら一篇の冒険活劇小説をよんでいるかのような感覚で、時間が取れ次第、すぐに続きを読むというほど熱中して読んだのだが、最近では滅多に無いことで、それほど面白かった。

台湾の独立に関する話である。日本が戦争に敗れたあと、蒋介石がほぼ中国全土を手中にしていたのだが、延安の毛沢東政権は一時3万人にまで減少したのだが、共産軍が盛り返し、いわゆる国共内戦で国民党軍は連戦連敗。北京から上海まで追いやられ、さらには上海まで占領されてしまった。廈門を死守せよと部下の湯恩伯将軍に命令するが、これも心もとない。なぜなら、湯恩伯将軍は上海を死守せよと命令されたが、市民に迷惑をかけることから、ほとんど抵抗せずに退却した。その頃のことである。

つまりは、蒋介石が追い詰められて大陸に居られるかどうかの瀬戸際である。事実彼は台湾に逃避するのだが、根本ひとりが加わったからといって逆転の秘策があるわけでもない。どちらかといえば、根本中將は、死に場所をさがしていたのかもしれない。

この逃避に際して、蒋介石は、現在故宮博物館に展示されている宝物を最優先で移動させ、兵士はあとまわしになり、中には、取り残されて捕虜になり、廈門や金門島を攻撃せざるを得なかった兵士もいる。

根本中將は、終戦時北支那方面軍の司令官で内モンゴルの守備にあたっていた。ソ連が8月9日、一方的に日ソ不可侵条約を破棄し攻め入ってきた時、上層部の武装解除をして投降せよ、という命令に抵抗し、断固戦い、ソ連兵を一步たりとも侵攻させなかった。民間人4万人と35万の兵士の命を護るためである。ラジオで「全責任は私がとる。皆さん安心してください」と明言した。

隣で守備についていた関東軍の意気地なさのために、どれほどの満洲に住んでいた人々が被害にあったか、を考えれば、その決断には敬意を表するしかない。別にまとめるかもしれないが、満洲のひとびとは、大変な目にあっている。その意味で、根本の英断には、頭が下がる思いである。そして敗戦に際し、割腹するつもりであったらしい。しかし、蒋介石に恩返しをするべく、生きた。

蒋介石という人物は、毀誉褒貶の激しい人で、夫婦そろって欲が深く、品性下劣であるし、兵士よりも宝物を大事にしたりするような人である。黄河を決壊させ何十万もの被害者をだした。しかし、大陸的な鷹揚さを示すこともあり、「怨みに報ゆるに徳をもってせよ」とも言った人で、根本とも直接に会って会談をしている。このとき、全員無事に帰国できたことから、根本は蒋介石に深い恩義を感じていた。何かの時には、かならず、この借りを返そうと考えていた。もうひとつ、カイロ会談で、日本に天皇制を残すことを強く提唱し、ルーズベルトらを納得させている。これにも恩義がある。

(大東亜戦争において、各国の利害が絡んでいて、日本は汪兆銘政権を、英米は蒋介石政権を、ソ連は毛沢東の共産軍を援助していた。この蒋介石政府の援蒋ルートがいくつかあり、そのひとつがベトナムなどの仏印ルートである。これを排除するためにマレー半島に電撃的に侵攻し、英仏軍を蹴散らしたことが「アジアへの侵略」ということになっている。しかし、これらの地域は、ヨーロッパ各国の植民地であり、侵略というならイギリスやフランスであり、オランダ（現在のインドネシアを占領）である。だから、日本軍は、アジア人を攻撃したのではなく、欧州各国を排除しただけのことで、アジア人からみれば解放者になる。これを侵略というのはおかしい。日本の敗戦後にこれらの国々が独立したことでわかる。だからこそ村山トシ吉など「謝罪爺」がマレーシアのマハティールに窘められたのである。日本がアジアのどこの国を侵略したのか？ 今、資料を集めてまとめつつあります。近い将来、侵略戦争についてもまとめる予定です。)

ところで、関東軍。山海関より東にあるから、この名がついた。幼い頃から見ても、元関東軍だった、という人にあまりお目にかかったことがない。当然のことながら、軽蔑されることはあっても羨ましがられることもない。下手をすると、ぶん殴られるかもしれない。以下の話は、戦後 40 年以上経ってから聞いた話である。関東軍などの上層部には 8 月上旬には敗戦がわかっていたらしい。少佐で敗戦を迎えた人が、あるとき話してくれたのだが、「ワシヤこれだけは死ぬまで言わんつもりやったんやが、実はナ。関東軍の高級将校や参謀たちは、どうやって自分の家族を帰国させるか相談しよったんじや。ワシヤそれを聞いたとき、あきれてしもうてナ。国民を守るよりも、自分の家族を優先しよったんじや。」

これはボクの考えたことなのだが、蒋介石は根本中將に、日本兵とともに国共内戦の指揮をとってもらいたかったのではないか。蒋介石は日本に留学していたことがあるから、日本軍の強さと規律正しさについてはよく承知している。これに対し根本將軍であれば、たとえば「この軍隊は天皇の軍隊であって、私の軍隊ではない（中国ではこれが普通）。勝手に私兵化することはできない」などと言ったのではないか。ソ連に対抗している時、傳作義將軍の到着を待ちわびて、それまでにソ連の侵攻を許したなら、根本は腹を切るつもりであった。傳作義將軍が到着したとき、ずいぶん喜び、その人柄と威厳に深い感銘をうけていたし、傳將軍は行政家としての手腕も優れていたらしい。

昭和 21 年、最後の帰還船で日本に帰って、貧しい中で過ごしていた根本博のもとに、李銑源という男が傳作義將軍の使いと称して国府軍というより台湾を助けて欲しい、とやってきたのが昭和 24 年のことである。それまでも新聞で、蒋介石が北京を追われ、上海まで敗走していることを知っていた將軍だから、なんとか渡航費を捻出し、蒋介石の役にたちたい、とかなり持っていた骨董品を売ったりして費用を工面していた。渡りに船とばかりにその話に乗ったのだが、如何せん、渡航費としては充分ではない。さらには、通訳と

してかつて一緒に過ごした吉村是二を探し出し、明石元二郎元台湾総督の子息も、故郷の福岡で金策にかけずりまわったが、なかなか大変だったらしく、明石の子息は帰京後4日目に心労のため亡くなった。奥様には、多少のいきさつを話していたらしい。

(蛇足ですが、明石元二郎は、日露戦争のときドイツの皇帝ウィルヘルムⅡ世をして、「明石は大山巖率いる20万の日本陸軍に匹敵する仕事をひとりで成し遂げた」と言わしめた、ロシア革命の基礎を作ったひとりである。台湾を愛し、道半ばで亡くなったが、分骨することを遺言にした。)だから、明石の子息が駆けずり回ったのである。

ようやく渡航費が工面でき、家を出る時は釣りに行く格好で、宮崎からわずか26トンの木造船(いわゆるポンポン船)で出発した。途中、いつ沈没してもおかしくない状況もあり、水漏れを掻い出しながら屋久島や久米島を経過し、(沖縄は米軍占領下だから寄るわけにはいかない。)そしてようやく、基隆まで辿り着いた。

吉村は、若年時より中国に渡り、日本人でも中国人でも通るくらいに中国語に達者で、根本が北支那方面軍司令官の時にも、通訳兼情報源として貴重な戦力であり、根本はずいぶん可愛がった。吉村にしても、根本中将は、中国人を蔑視する陸軍の風潮に批判的で、同格としてみるべきだという考え方と、真の五族協和の精神をもっていたことに心酔していた。根本は、吉村に「オレの骨を拾ってくれ」と言っている。さらには、根本は中隊長や連隊長、司令官として赴任している間、鉄拳制裁を厳禁していたし、叱るときにも、怒鳴りつけるよりも諄々と諭すような人柄だったから、若い兵士からも慕われていた。

さて台湾に到着して歓迎されるか、と思えば密航者だから、と牢にいれられてしまった。蒋介石も傅將軍も知らないことだったらしい。ただ、「台湾を救いに来た日本の元軍人だ」と言っても相手にしてくれない。そのうち、そのうわさが広まり、蒋介石の腹心の耳にはいる。それを確かめに来て、翌日蒋介石に直接会うことができた。

ここで、廈門の守備隊の湯恩伯將軍の軍事顧問として廈門を視察する。ここは、三方を陸地に囲まれていて、守り切れない。廈門を捨て、水路の向うにある金門島を死守することにした。湯將軍は蒋介石の部下だから廈門死守を拒否できないが、根本中将は顧問だからある程度対等に話せる。結局、金門島を防御線とすることになった。

なにせ、共産軍はずっと勝って来たから、今回も驕りがあり、近隣の漁村からすべてのジャンク(木造帆船)を残らず供出させ、小銃1丁で2万人(根本の手記では3万人)が分乗して金門島に攻めて来る。根本は、あらかじめ灯油を満載した小船を用意しておいて、敵が上陸したらすべてのジャンクを焼き払う。共産軍は逃げ道がなくなった。そこで総攻撃に移る。敵も背水の陣だから、もっとも激戦になった金門島の北西部の古寧頭の村に村民を人質に立てこもる。湯將軍たちは、初めてと言って良いほどの勝ち戦である。古寧頭の村民もろとも殲滅するつもりであったが、根本は、村民を死なせてしまったら意味がなくなる、と説得した。そこで、包圍作戦を解いて、北側に逃げ道を作る。共産軍が村から

出た所を包囲して殲滅をはかる。2万人のうち1万4000人が戦死。6000人を捕虜にした。古寧頭の村民には被害がなかった。台湾側の死亡者は1269人、負傷者1982人。

3年後根本は、香港と台湾で発行されている「新聞天地」に、この戦いの詳細を記録している。3万人の共産軍で、8000人が捕虜。ジャンクは182隻。

ここに台湾人の管仁健が現れる。金門戦争の研究者として知られていた。この管でさえ金門戦争に日本人がいたことをまったく知らなかった。あるとき、古寧頭の伝説に触れる。「自分たちがあの戦争で死ななかったのは、ある日本人のお蔭だ、という話を古寧頭むらの古老が話してくれた。日本人の将軍が国民党の軍にいて、その人が立て籠もった共産軍を村の外に出して、これを撃滅した。その日本人のお蔭で私たちは助かった。」管が、その後いろいろ調べているうちに、その日本人が「戦神」と呼ばれていたことがわかった。(戦神は、日本語の軍神とは少し意味が違う。)丁寧にしらべて、ついに根本博の名にたどりつく。

1958年8月、823戦役があり、このとき中国は金門島に40日間で47万発の砲弾を撃ち込んだ。で、2008年8月に823砲戦の50年式典がおこなわれたが、国防部に非難と要望が殺到した。要するに、「823砲戦」だけ、なぜ記念式典をおこなうのか

もともと金門島を台湾領にした古寧頭戦役がなければ、823戦役もなかったはずである、というわけである。

この間、軍としては日本人が存在する必要がなかった、ということを主張するし、新聞天地の記事も黙殺する。当然のことで、台湾というのは、もともと住んでいた本省人と大陸から逃げて来た蒋介石が引き連れて来た外省人との軋轢があった。2.28事件のように、本省人のインテリ層を大量に殺害したこともある。そのため、日本人の存在を隠したかったのだろう。

そこで、2009年10月25日、「古寧頭戦役60周年記念式典」を挙行しようとする。この時、馬英九総統は中国よりの姿勢が鮮明になってきているから、難色を示すのではないかと心配されたのである。

ところで、根本博を引っ張り出した李鉦源とは何者だったのか。特務員とかいろいろ説があったが、門田氏の努力で、娘さんが大阪に住んでいることがわかり、父母ともに反国民党だということ。だから蒋介石も知らないうちに何かで知った根本博の所を訪ね、目的は「台湾を救って欲しい」ということである。台湾に来る時にボンボン船を運転していた李麒麟もよくわからない存在だった。結局、2人とも元台湾総督府に関係していた人で、日本に親しい人がいてわかったのだが、一途に「台湾を助けて欲しい」一念だったらしい。そして、金門戦争では、根本さんが一番偉かった、と常々語っていたという。不思議な話が残っていて、李鉦源は、1996年に亡くなったのだが、お嬢さんの話で、「骨上げのとき、骨がグリーンに輝いているというか、花が咲いているような感じになっていたのです。火葬

場の人によると、これは“舍利花”といって、生きている時に、人のためになる、すごいことをした人にだけ出るものだということです。“この人は、生きている時にすごいことをやった人だ。人のために尽くした人ではないか”と火葬場の人に聞かれ、私は不思議でたまりませんでした。・・・思い当たることといえば、根本さんのことしかありません。生前、父が誇りに思っていたことは、唯一、自分は根本將軍を台湾に連れてきて、台湾と台湾人を守った、ということだけでした。・・・私には思い当たるものはそれしかなかったのです。」

金門島では重要な施設はすべて地下にあるという。

2009年9月、明石元二郎の孫と吉村是二の子息、さらに門田隆将氏の3人は、記念式典の直前に出席を許され、しかも最前列である。演説のあと、馬英九総統が3人に「台湾へようこそ」と挨拶をし、堅く握手をした。・・・理解してくれたい。

敗戦続きの国民党に参加することは、命懸けだったはずである。根本博中将は、死に場所を求めて行ったのかもしれない。

蒋介石は、三対の景德鎮の花瓶を持っていた。一対はイギリス皇室、一対は日本の皇室、のこる一対をもっていたのだが、根本が帰国するとき、その片割れを土産に持たせ、1000ドルの餞別とともに渡して、その労をねぎらった。その花瓶は今でも根本にゆかりの地にあるという。

人間、単に損得だけで行動するような打算的な人物ばかりでなく、根本博のように「義」で動く人物もいる。心温まる、かつ日本人として自慢できるような人もいることに、われわれは誇りをもってもいいのではないか。

2015. 02. 28.